

# 「児」と呼ばれた紫の上

## はつめに

紫の上がはじめて『源氏物語』に登場するのは若紫巻である。北山の少女として描かれた紫の上はまだ十歳であつた。<sup>注1</sup>

癪を患つた源氏は北山の聖を訪ね、その地で、ある僧都の庵室に身を寄せる少女を垣間見る。白い単衣の上に山吹襲の汗衫を着て顔を真つ赤に泣きはらしながら走る少女の姿は色彩豊かで、ゆらゆらと揺れる髪の写真には動きがあり、生き生きとしていて印象的である。

さて、垣間見から戻つた源氏は、紫の上を「児」と思い起こしている。

さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人  
の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。<sup>注2</sup>（若紫二〇九）

## 鵜飼祐江

紫の上の呼称は『源氏物語』中に四六種類二六一例<sup>注3</sup>確認できるが、そのうちこの若紫巻だけでも一〇種類二九例もの用例があり、中でも「児」のような、若紫巻のこの箇所だけに確認できる用例もある。

実際のところ「児」は、生まれたばかりの赤子などかなり低年齢の人物を呼ぶ語であるらしく、この時の十歳という紫の上の年齢には少々ふさわしくない。

十歳くらいの子どもはまだ「児」に含むと考えることもできるが、十歳の紫の上は少納言によつてはつきりと、「いとむげに児ならぬ齡」（若紫二四一）つまり、「児」ではないとされている。しかし、この時少納言は同時に「またはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず」「中空なる御ほど」「すこしもなずらひなるさまにもものしたまはず」と表現し、「御年よりも若びて」いる、と年齢に不相応な紫の上の幼さをも強調している。

林田孝和氏は紫の上の成長の遅れ、「おくて」の在り方が神の子であることを意味すると指摘している。<sup>注4</sup> これを受けて原岡文子氏は、紫の上を「童児神」であるとし、「まさに光源氏の視界に飛び込んだ童女の比類なき輝きは、童児神の無垢の輝きであつたのだ。とすれば、無垢を裏腹にする、荒ぶる力、或いは秩序に組み込まれることのない原初之力もまた、紫の姫君をめぐって探り辿ることができるのではあるまいか。」と指摘<sup>注5</sup>されている。両氏によつて指摘される紫の上の幼さはここの「児」という呼称にも反映しているのではあるまいか。

本稿では、この極めて特異な「児」という呼称を中心に、若紫巻の紫の上に使用される呼称を手がかりとして、紫の上における「幼さ」がどのように造型されているのかを考えてゆく。またそれがこの物語の中でどのような意味を持つのかを、特に源氏との関わりから考察してゆきたい。

## 一

若紫巻における紫の上の呼称用例一〇種類二九例の内訳は以下の通りである（括弧内はそれぞれの用例の頁数）。

a 「女子」 一例（二〇六）

b 「子」二例（二〇七・二二三）

c 「人」五例（「ねびゆかむさまゆかしき人」二〇七・「あはれなる人」二〇九・「あやしき身ひとつを、頼もし人にする人」二二八・「うしろめたげに思へりし人」二四〇・「をかしかりつる人」二四七）

d 「若草」三例（二〇八・二二六・二二七）

e 「初草」二例（二〇八・二二六）

f 「児」 一例（二〇九）

g 「若君」五例（二二四・二四五・二五五×2・二五六）

h 「君」六例（二三七・二四二・二五四・二五七・二五九・二六二）

六一）

i 「ゆかり」 一例（二三九）

j 「幼き人」三例（二四二・二四七・二五三）<sup>注6</sup>

このうちg「若君」は、身分ある貴人の子弟を呼ぶ際によく用いられる呼称で、夕霧や薫、明石の中宮などの幼少期にも確認できる。この時、夕霧一七歳、明石の中宮一十四歳、薫一十四歳であり、十歳の紫の上にも年齢的に適した呼称である。実際、若紫巻の紫の上にも五例用いられており、逆に言えば若紫巻の紫の上を一貫して「若君」と呼ぶことも可能なのである。

しかし、若紫巻の紫の上は、「若君」の他に九種類もの呼称で呼び表されている。これは一つには、北山で初めて源氏の視界に飛

び込んできた少女が、身分も出自もわからぬ存在であつたことに起因するものと思われるが、このあたりの初登場時の紫の上の呼称の詳しい分析については別稿に委ねたい。

さて、この一〇種類の呼称は、全体として紫の上の幼さを印象づける意味合いを持つと言える。例えば「女子」「子」は、誰かの娘や子であるという意味が強く表れる呼称で、紫の上が大人の養育下にある存在であることが強調されている。「若草」「初草」は紫の上の祖母と乳母との歌の贈答による呼称で、紫の上の若さ、頼りなさが印象づけられている。「幼き人」は幼さが端的に表現された呼称であり、その他の「人」呼称でも、「ねびゆかむさまゆかしき人」(二〇七)と成長が望まれる存在、あるいは「あやしき身ひとつを、頼もし人にする人」(二一八)「うしろめたげに思へりし人」(二四〇)と、尼君に庇護される存在であることを物語る修飾部分を有している。

さらに言えば若紫巻の紫の上の描写には、「何心なくうつくしげなれば」「筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば」(若紫二五九・傍点筆者)のように「うつくし」「らうたし」「幼げ」などの形容が目につき、紫の上の幼さが強調されている。以上のように若紫巻では十歳の紫の上に対して、「初草」「若草」「児」といったはっきりと幼子を意味する呼称や、紫の上が誰か

の子どもであると表現する「女子」「子」などが用いられていることがわかる。中でも「児」に代表されるような、幼さが強調される呼称が選ばれており、幼さという属性が若紫巻の紫の上の造型にとつて極めて重要であつたことが推測される。さらに、紫の上が十四歳以上になり、新枕が描かれる葵巻以降には、幼さを強調する呼び方が用いられなくなってゆく。このように紫の上の呼称は、その年齢・物語の進行に応じて選択されていると考えられる。

## 二

『源氏物語』中の「児」という語を調べてみると、まず、第一に乳児の意味があり、少し成長した乳児には「小さき」という語を付して生まれたばかりの乳児と区別する場合もある。また、小さな子どもを「児」と呼ぶ事例もあるが、その場合もかなり幼い子どもに限って用いられている。「児」は、生後間もない乳児を中心としながら三歳ぐらいまでの幼子を指す、ちょうど現在の「嬰兒」「赤ちゃん」に近い、年齢制限の強い語と考えられる。

すなわち、「児」という語を確認すると、第一に、源氏桐壺一八、明石の中宮(遷標二九〇)、玉鬘の子(真木柱三九七)、五十日の祝いを済ませた薫(柏木三三三)、乳を飲む雲居の雁の子(横笛三六〇)、五日の夜を迎えた中の君の子(宿木四七三)など、い

ずれも生まれて間もない乳児を指して用いられ、宇治の八の宮が子を望む場面に見られる「児」（橋姫一一八）も乳児を意味している。以上の七例から「児」が乳児を意味する語として用いられていることが確認できる。

次に、「児」が「小さき」という修飾語を伴う例を確認する。横笛巻では薫を「小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ」（三五〇）とし、夕霧巻でも雲居の雁に戯れかかる幼子を「小さき児」ひかり引きしろへば」（四三〇）と表現する。横笛巻での薫は、満一歳余りのようやくよち歩きができる年頃である。夕霧の子も、雲居の雁に這い寄ることができる程の子である。この「小さき」という修飾語が加わった用例では、単独で「児」とする時より、むしろ若干月齢が高くなっている感じがあり、乳児ほどに幼いには違いないが、先に挙げた「児」が意味する生まれたばかりの乳児よりは成長している、と捉えるのが妥当であろう。「小さき」が加わることで、生まれたばかりの乳児と区別され、ほんの少し成長した乳児であることが示される。換言すれば、ただ「児」と言う場合、一義的には生後間もない乳児を指すのではなからうか。

次に、「児」がイメージさせる年齢についてさらに考えてみよう。子どもを好む紫の上の性格は「児をわりなうらうたきもの

したまふ御心」（松風四二四）「児」つつくしみしたまふ御心」（若菜上一一）と表現されている。この場合の「児」は特定の乳児を指すのでなく、幼子全般を意味している。松風巻での話題は三歳の明石の姫君であり、若菜上巻では明石の中宮の生後間もない皇子を前にしての表現である。これらの「児」も、子どものうち、〇一三歳の嬰兒の範囲の者に対して用いられているのである。

「宮たちは、思ひなしこそ気高けれ、世の常のつつくしき」子どもと見えたまふに」（横笛三六五）と、薫を、明石の中宮の産んだ宮たちと比較する場面にも、「児」が確認できる。「世の常の」とあることから、ここでの「児」でも一般的な子どもを想起し、比較している。この時もつとも幼い薫は満一歳余り、三の宮（匂宮）は三歳、二の宮は四、五歳であるが、ここでの思考の中心は薫である。すなわち、一歳余りの薫を基準とし、眼前の二の宮、三の宮についても一歳余りの時の彼らの姿と重ねながら、薫に比べると二の宮たちは「世の常の児」に過ぎないと言っただろう。

この他、手習巻（二八三）の狐にさらわれた「児」も、二つばかりになる子であり、低年齢の幼子を指している。

しかしながら「児」の語が、嬰兒期を過ぎた人物にも用いられる場合もある。その場合には、対象を「児」と感じる、呼ぶ人物の特殊な認識が働いていることが表現されていると考えられる。

以下の二例は、対象の人物自身を指して「児」と呼んでいるわけではないが、共に大人に対して用いられている。

まず、第一例。源氏との結婚を朝顔の齋院に勧める女五の宮は、源氏に対して「児」という語を用いている。

「この君の、昨日今日の児と思ひしを、かくおとなびてとぶらひたまふこと。容貌のいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたまへれ」（少女一八）

ここでの「児」は「おとな（大人）」に対する語であり、まだまだ小さな赤ちゃんだと思っていたけれど、という語りかけである。無論、この時の源氏は幼子などではなく、一人前の大人である。

「児と思ひし」という表現であるから、現在の源氏を「児」と呼ぶのではないが、三十三歳で内大臣を勤める立派な男の前に、「赤ちゃん」と思っていた」という表現には違和感を覚える。誇張的で滑稽でさえあるが、女五の宮にとって源氏は幾つになっても小さな子どもそのままであり、『新全集』頭注の言うように、そんな時から源氏を知っていることが「女五の宮の自慢」なのであろう。源氏に対する女五の宮の思いや、宮の人柄を窺い知ることができる表現である。大の大人を「児」と呼んでしまうほどに年老いた女五の宮、いつまでも子どものままの源氏のイメージを大事にしている女五の宮の姿を読み取ることができる。

第二例の、大宮が夕霧を子ども扱いする様は、女五の宮の発言と同様に、大宮の人柄を生き生きと伝えている。

夜昼うつくしみて、なほ児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、（少女二七）

この時夕霧は十二歳。赤ちゃん扱いを受けるのを厭う、元服した立派な大人である。しかし、愛しい孫を前に思わず、小さな頃のままだに「児」のように接してしまふ大宮の姿が窺えるのである。

この他、蜻蛉巻で薫が幼い時垣間見した女一の宮の姿を思い出している場面に見られる「児」も特殊な用いられ方である。

まだいと小さくおはしまししほどに、我も、ものの心も知らで見たてまつりし時、めでたの児の御さまやと見たてまつりし、（蜻蛉二四九）

女一の宮は匂宮の姉で、蜻蛉巻では二十六、七歳になるが、この用例は現在の女一の宮を指すものではなく、思い出の中の女一の宮を指す。この時薫は二十四歳。女一の宮は薫よりも、年上である。女一の宮が「児」だった時なら薫はなお幼く、記憶などないだろう。薫自身が物心のつく、記憶の残るほどの年齢の時には、年上の女一の宮は少なくとも「児」ではあるまい。それなのに薫はなぜ「児」の女一の宮のイメージを記憶するのだろうか。

薫は柏木と女三の宮の不義の子という重い罪を背負っており、

常に自らの存在に不安を抱えて生きている。その薫も「児」であつた頃にはいささかの疑いも、悩みや迷いもなくいられたはずである。無垢な幸せな日々の薫自身の記憶が、愛らしい女一の宮を見た風景に思い重ねられているのではないか。「児」という語は薫がまだ純真な心でいられた頃の清らかな思い出を喚起し、その中心に居たのが女一の宮である。もとよりこの記憶の中の女一の宮は、通常「児」と呼ぶ年齢ではないのだが、薫にとって自身自身が純真でいられた幸福な時のシンボルである、清らかな存在の中心であるゆえに、女一の宮を「児」と呼ぶのである。ここでの「児」は、薫の中に占める女一の宮の記憶が特別であること、ひいては薫という人物を物語る特別な語なのである。

さて、ここで確認した少女巻の一例、及び蜻蛉巻の一例では、対象の人物自身をそのまま「児」と呼ぶわけではなく、「児と思ひし」「児のやう」といつかたち、あるいは過去を振り返る場面で用いている。これらの例は見られる対象に「児」と呼ばれる要因があるのではなく、見る側の固有な感情が対象を「児」と認識させているのであり、そうした人物の感情を表現している。

この他に「児」は、十三歳以上の女三の宮の様子を表現する際にも用いられている。

女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのこ

とことしく、よだけく、うるはしきに、みづからは何心なくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり。(若菜上七三)今はまほにも見えたてまつりたまはず、いとうつくしうらうたげなる御額髪、つらつきのをかしさ、ただ児のやうに見えたまひて、(横笛三四八)

この二例もやはり、「児の心地」「児のやう」のかたちで用いられており、女三の宮の存在自体が「児」そのものであるわけではない。若菜上巻では「幼きさま」を、横笛巻では出家姿を、「児」のようだと表現しているのである。

しかし、これらの「児」の用例は、前掲の見る側の特殊な感情が「児」という呼称を選択させた用例とは異なっている。

前掲の例はみな、見られる対象(源氏など)は歴とした大人であり、対象の大人にその幼少期の思い出を重ね合わせて「児」の語が用いられていた。しかしながら、源氏は女三の宮の幼少期を知っているわけではない。また女三の宮は、「いとらうたげに幼きさまにて」「みづからは何心なくものはかなき御ほど」「ことに恥ぢなどもしたまはず」「いとうつくしうらうたげなる御額髪、つらつきのをかしさ」とも形容されており、女三の宮自身に「児」と

呼ばせる性質が内包されていることがわかる。つまり、女三の宮に用いられる「児」は見られる対象（女三の宮）側に起因するものだと言える。源氏が、しばしば女三の宮を物足りないと評することからわかるように、女三の宮には大人として欠けたところがあるようだ。女三の宮に用いられる「児」にはただの可愛らしさでは済まされない、「片なり」の女性を想像させる語感がある。

このように『源氏物語』の中で「児」は基本的には嬰兒の意で用いられているが、例外的に、大人を「児」と呼んでしまう事例もある。その場合は、逆に、そう呼ぶ側の人柄や「児」と呼ばれる対象との親密さを窺うことができ、また、対象に対しての呼ぶ側特有の意識が投影されるのだと考えられる。一方で、十三、四歳の女三の宮が「児」と呼ばれる例のように、呼ばれる対象自身に「児」と呼ばせる要因がある場合もある。

### 三

では、先に引用した紫の上の「児」の用例はどうであろうか。源氏は紫の上の幼少期を知らず、他の人物のように「児」の時の姿を重ね合わせ、記憶を抱きしめるように「児」と呼ぶわけでもない。目の前の少女を呼ぶのであるから、薫が、記憶の中の女一の宮の年齢を歪めている例とも異なっている。また、前節で確認し

た例と大きく異なるのは、紫の上の場合には「児と思ひし」「児の心地」「児のやう」などではなく、「いとうつくしかりつる児」がな（若紫二〇九）と、はっきり眼前の紫の上を「児」と断定している点である。

では、源氏はなぜ、紫の上を「児」と呼んだのだろうか。前節で、幼少期を過ぎた人物に用いられる「児」には、見る側、見られる対象いずれかに原因があることを確認したが、紫の上の場合には、見る側と見られる対象のそれぞれに、要因があるのではないが。つまり、北山の少女を「児」と見做すような感情を源氏が抱き、片や紫の上自身にも、十歳の少女のあるべき姿からは程遠く、野山を走り回るような、「児」めいた性質を有しているという、源氏と紫の上双方に「児」という呼称を選択させる要因があったのではないかと考えるのである。

北山で短い髪をゆらしながら走る紫の上の姿には、はつとするほどのまぶしさがあつたが、十歳にもなれば通常、姫君たちはこれほど閑達に動き回ることはない。現実社会では彰子のように十二歳で入内している例もあり、明石の姫君は十一歳での入内である。こうした少女たちと比べると、北山の少女の様子は年齢にそぐわない、「児」と呼びたくなるような振舞いなのである。

この閑達に動き回る紫の上の姿は、格式張った貴族社会に身を



置き、無感動な妻に閉口し、叶えられない恋に鬱屈した日々を送る源氏の目には、ことさら鮮やかに映ったに違いない。北山の少女の姿は、世の中の枠組みにはまらず、無邪気で純真無垢である。源氏の心にはその清らかな様が単なる少女に留まらず、「児」と映ったのではないだろうか。

ところで、このように紫の上が秩序の枠にはまらない神の子のような存在であり続けた背景には、彼女の育った環境が大きく反映していると考えられる。紫の上は、早くに母を亡くし、幼くして祖母に引き取られており、都から離れた北山という場所に度々身を置くような生活ぶりである。不幸にも、夫にも愛娘にも先立たれた老齢な祖母の尼君からは、紫の上の教育に対して積極的な姿勢は窺えず、例えば走り回る孫娘に厳しく常識を諭すようなこともない。紫の上は受けるべき教育を受けていないのである。また一方、紫の上自身にも、咎められながらも雀を飼育してしまうように、あるべき女性の枠組みに納まらないエネルギーを持ち合わせている面があるといえよう。

通常、「児」の時間はあまりに幼い時期に通り過ぎてしまったために、多くの人は自覚なく過こしてしまうものである。しかし紫の上は、没落した姫君という特殊な環境ゆえに本来ならば秩序の中に取り込まれているはずの自覚ある十歳という時期に、反秩序な

存在であり得たのである。

このように紫の上の具現し源氏が惹きつけられた「児」の意味を、まずは紫の上と源氏の共有する「注離遊び」の面から見てみよう。

紫の上を自邸に引き取りたい源氏は、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、離遊びなどする所に」（若紫二四五）と言って、紫の上を一条院へ誘っている。紫の上は北山でもお絵描きやお人形遊びをしていた（若紫二四）。紫の上の心を動かすのには、絵と離遊びが有効なのである。事実、源氏は無理に紫の上を離遊びから遠ざけるようなことはせず、反対に、「離など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊びつづ、こよなきもの思ひの紛らはしなり」（若紫二五九）と一緒に離遊びに興じている。

二条院で迎えた最初の元日も紫の上は、源氏に見立てた人形で遊んでおり、離遊びに夢中である。

いつしか離をしすゑてそそめたまへる、三尺の御厨子一具に品々しつらひすゑて、また、小さき屋ども作り集めて奉りたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。「離やらぶとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。（紅葉賀三三〇）

離道具を壊された紫の上を、泣かないで、と源氏はなだめる。紫



の上にとつて離遊びの道具は宝物であり、壊せば泣くこともあるのだらう。北山で雀の子を逃がしてしまつたと泣いていた少女は、源氏のもとでは玩具が壊れたことを泣く。雀の子、玩具の破損と紫の上の涙の理由はいかにも子ども染みている。紫の上は大人が泣けなくなつてしまつた些細なことをまだまだ大切にしている子どもなのである。

元日の朝拝に赴く途中、源氏は「今日よりは、おとなしくなりたまへりや」(紅葉賀三三〇)と、紫の上の部屋に顔を出す。この新春の源氏の言葉は紫の上への願望でもあるのだらう。

紫の上の幼げな振舞いを少納言は嗜めている。

今年だにすこしおとなびさせたまへ。十にあまりぬる人は、離遊びは忌みはべるものを。かく御男などまつけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらせたまはめ。(紅葉賀三三二)

離遊びの道具を部屋いっぱいに広げる紫の上の生活空間は子どもの世界に満ちている。本来なら、十にあまりぬる人は遠ざかるはずの離遊びに耽り、夫のいる身だという少納言の言葉にはじめて「我はさは男まつけてけり」(若紫三三二)と思ひ至るように本物の夫婦関係に疎いあたりが「御年よりも若びて」(若紫二四一)いると言われる所以なのであらう。紫の上の結婚に対する自

覚はおままことの延長にあるものである。源氏との関係は、「いかうせつかぬ御添臥」(紅葉賀三三二)と表現されており、源氏との生活そのものが離遊びのようなものである。

そもそも離遊びは少女の想像・創造力で成り立つ遊びである。その意味では、紫の上は彼女独自の世界を作り出して遊んでいる。源氏によつて二条院に引き取られた紫の上は、源氏の生活空間に取り入れられているのだが、離遊びをすることで、源氏の空間に取り込まれながらもその空間の中に紫の上自身の世界を作り出しているのである。そして、紫の上の離遊びに加わる源氏は、紫の上の空想世界に参加させられていることになる。源氏は離遊びを通じて紫の上の世界を体験し、自分の空間の中に作られた紫の上の世界に逆に取り込まれている。源氏は紫の上の幼い世界に歩み寄つて「児」の世界を共有しているのである。

この頃の源氏は、正妻として葵の上を迎えている。葵の上には隙がなく、少しも源氏に打ち解けようとはしない。氣位高く嗜み深い妻との結婚生活は源氏にとって息が詰まるものである。また、一方で源氏には心から想う女性、藤壺がいるのだが、父でもある帝の寵妃との関係は大罪であり、空しさや苦しさ募るばかりである。源氏が紫の上の幼さが生み出す世界へと駆り立てられたのは、罪を犯していることへの後ろめたさ、罪深さから逃れたいと

いう思いによるのかもしれない。

さらに、思えば、源氏は早くに母を亡くし、父は自分一人のために存在するわけではない、公的な存在、帝である。源氏の場合、無条件に親の愛情にくるまっていた「児」の期間は短く、弘徽殿女御を初めとして、決して好意的ではない周囲のまなざしに取り囲まれた、緊張感の高い宮廷生活を早くから強いられていた。気難しい右大臣家の姫君葵の上との結婚、甘えることの許されない美しい継母藤壺の登場は、こうした早すぎる源氏の「大人の時間」の中での出来事と言えるだろう。無条件に与えられるはずの親からの愛情に恵まれなかった源氏は、紫の上の「児」の時間を大切にすることで、「児」の時間を疑似体験し、「児」が親に向けてような無償の愛と信頼を紫の上から受ける。慈しむことで、慈しまれることを知るのである。それゆえに源氏は、必ずしもこの時紫の上がすぐさま大人になることを望んではおらず、共にその時間を過ごすことに喜びを見出しているのではなからうか。

源氏にとって「児」は日々の物思いから避難させてくれる癒しの存在であり、無条件に愛情を与え慈しみ、信頼という絆を培い合う存在なのだということが、離遊びの描写を通じて浮かび上がってくるように思ふ。

#### 四

しかし、紫の上に具現していた「児」を、源氏の欠落を取り戻させ救済させるものとだけ考えてよいのだろうか。冒頭に引いた「児」に続く文脈に注目してみると、藤壺のように育てる対象としての紫の上というもう一つの側面が見えてくる。

紫の上を「児」と認識した源氏は、「かの人の御かはり」（若紫二〇九）つまり藤壺の代りとして一緒に暮らしたい、と思う。これは、源氏が紫の上を自分の手で育てるための赤子のように自我の無い「児」として見ている表れたとも考えられる。源氏は紫の上を藤壺のような理想の女性へと育てたいのであり、しかも自らの手で育て上げるためには、まだ汚れの無い無垢な「児」でなければならぬのである。

北山で少女に心惹かれたとき源氏は、

ねびゆかむさまゆかしき人かな　と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとう似たてまつれるがまもらるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。（若紫二〇七）と、その理由に思い当たって涙ぐんでいる。紫の上は「限りなう心を尽くしきこゆる人」へと「ねびゆかむさまゆかしき人」なのであり、のちには藤壺に育つことが期待されている。成人した姿

を藤壺とするなら、北山で源氏が見出したときの紫の上はいずれ藤壺に成長するはずの種<sup>たね</sup>、つまり赤子なのであって、ゆえに源氏は「児」と呼んだのではないか。物心もつかない幼子を表現する「児」という呼称からは、一人の女性として求められたのではなく、藤壺の種として求められた紫の上の存在意義が読み取れるのである。

「児」を幼子の清らかさによる救済を求める呼称だと考えれば、「明け暮れの慰め」は「児」が源氏を日々の辛さから「慰め」という意になるが、藤壺の種である「児」と考えるのならば、「明け暮れの慰め」、つまり、朝夕の紛らわしのために藤壺の種である「児」を弄ぶということになる。藤壺を得られぬ源氏は、藤壺の「御かはり」を生活の「慰め」としたのである。

帚木巻のいわゆる「雨夜の品定め」で、左馬頭が語る女性論に従順な女を自分で教育しながら妻にするのが良いというものがあった(帚木六四)。自我を持たない幼子は希望通りに育てるのには最適の存在である。ましてや憧れの藤壺のゆかりであるならなおさらであろう。

源氏が紫の上の世話をする描写においては「人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばやと思す」(若紫二二三)のように、「生ほし

立つ」がその成長段階をたどるキーワードとなっており、葵・賢木・須磨・若菜上・幻巻に紫の上に対する「生ほし立つ」という語が散見する。このうち賢木巻では「生ほし立てたり」(二一八)と完了形が用いられ、紫の上の教育が一応完了したことが示される。紫の上は十六歳。新枕から二年が経過している。源氏は自分の筆跡に女らしさが加わった紫の上の筆跡(賢木一一八)を賞賛し、自身の教育を自負している。紫の上の書の手本は源氏であり、教育を施したのも源氏である。ところで若菜下巻で源氏は「女子を生ほしたてむことよ、いと難かるべきわざなりけり」(二二六三)と漏らしている。女子の養育が難しいのは、女子の人生が思う通りにゆかないからである。つまり「生ほし立つ」という表現には、育てる側が育てる対象を自分の枠にはめて育て上げるという意識が働いていることが窺える。紫の上の死後にまで用いられる「生ほし立つ」という語は、紫の上に対する養育者という源氏の一貫した姿勢を示す語だと言えよう。しかしながら、先に見たように紫の上は、源氏の枠にはめられているだけの女性ではないはずである。

興味深いことに、紫の上の教育に際して源氏が藤壺のように育てようとした形跡はない。紫の上の筆跡は源氏との文のやり取りの中で修得されたものであり、藤壺の文字が手本に与えられるこ

とはなかつたようである。後年、源氏は藤壺の筆を「いとけしき深うなまめきたる節はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし」(梅枝四一六)とし、対して紫の上を臘月夜、朝顔の齋院に並ぶ仮名の三名手の一人に挙げている。その意味では筆跡において紫の上は藤壺を凌駕してさえている。

また紫の上の和琴について女楽で源氏が「昔、世づかぬほどをあつかひ思ひさま、その世には暇もありがたくて、心のどかにとりわき教へきこゆることなどもなく、近き世にも、何となく次々紛れつつ過ぐして、聞きあつかはぬ御琴の音の出でばえしたりしも面目ありて」(若菜下二〇四)と言うように、源氏自身が紫の上の音楽(特に和琴)の教育に積極的に関与していないことが窺え、書にも音楽にも藤壺を手本にするよう教育する様子は描かれていないのである。

さらに人柄の面においても、決して藤壺が手本とされているわけではない。むしろ、朝顔の斎院の人柄には「つれながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ」(葵五八)と感心し、紫の上の教育の参考としているが、藤壺関連にはこのような表現は見当たらない。また、折々嫉妬を見せる紫の上の性格は、人形のように完璧な藤壺にはない面を物語っているといえる。このように、紫の上は藤壺

とは違った要素を伸ばされ、藤壺のゆかりではあるけれども全く違つたように育っているのである。その結果として紫の上が紫の上たり得たことは注目に価する。藤壺から遊離して紫の上として確立しているということはある意味では源氏の思い通りに育っていないわけだが、紫の上は藤壺とは異なる存在として理想の女性たり得ているということでもある。女三の宮を前にして、源氏自身が認めるように、紫の上には十歳にして、打てば響くような利発さがあつた(若菜上六三)。自らの離遊び世界に源氏を取り込んだように、紫の上には、源氏に育てられながら、内から食ひ破るような力があり、源氏を良い意味で裏切り、教えから外れてゆく。後年まで持続される「児」性や嫉妬心の強さなど、源氏の想定からはみ出した部分こそが紫の上の魅力なのだが、それが紫の上自身の内なる力によるものだということを源氏はわかつておらず、自分の枠の中に当てはめ、全てが自分の教育の賜物であると考えている。そのような事情を理解できない源氏と、源氏に魅力を感じない紫の上の、双方の悲しさが「生ほし立つ」から垣間見える。

源氏は自分の思う通りに育てる種として紫の上を「児」と見ていたが、紫の上が「児」と映るのは、従順さからではなく、むしろ、反発するようなエネルギーを持っていたからなのであり、それこそが紫の上の「児」性なのである。実際種は自分で育

つものであった。

源氏と紫の上には「生ほし立つ」が象徴するように、育て育てられるという親子のような関係が築かれ、晩年の紫の上はこの絆ゆえに、源氏を残して出家することもできず苦しめられている。そして、紫の上は源氏の教育を離れた一人の女性として最期を迎えたにもかかわらず、源氏にとって紫の上の存在はその死後までも自分が「生ほし立」てたというものだった。紫の上に対する意識として、育てるといふ側面が大きく占めていたことは、「児」と認識したことから始まった一人の結びつきと無関係ではあるまい。

## 五

若紫巻の話に戻れば、源氏と紫の上の関係は、いずれは夫婦の仲へと変化してゆくと想定されているには違いない。尼君は、紫の上の世話を申し出る源氏を、孫の年齢を勘違いしているのかと怪しみ（若紫二一六）、再度紫の上のことを打診されたときには「ともかくも、ただ今は聞こえむ方なし。もし御心ざしあらば、いま四五年を過ぐしてこそはともかうも」（若紫二二二）と応じている。尼君の判断は、紫の上が結婚できる年齢になるのを待て、ということであろう。源氏には少女の成長を待たずに妻にする考えはなくとも、血の繋がりのない女兒を男君が引き取るということ

は、妻を迎えると言っているのと同じなのである。

類似する表現をもう一例確認してみよう。尼君が亡くなった見舞いに紫の上のもとを訪れた源氏は、悪天候を理由に宿直を決め込み、紫の上の御帳の内に入り込む（若紫二四五）。源氏の振舞いに乳母、女房は紫の上の身に何かあつてはと動揺を隠せない。実際、適齢期の女性に対して同じ振舞いをすれば、それは直接男女の関係へと進展するはずである。乳母等が案じるように、男君の判断によっては十歳の紫の上にも全く危険がないとは言えないのかもしれない。しかし、当の源氏は自身異常な振舞いとは心得ながらも、あくまで少女の紫の上を成人女性たちと同等に扱う意図はなく、帰り道には恋の相手を別に求めて他の女の門を叩くのである（若紫二四六）。

一方で、紫の上の女房たちは翌日に源氏の訪れがないことを、縁組のはじめにひどい扱いであると嘆いている（若紫二四九）。源氏をはじめて泊まった夜を正式な結婚が成立したかのように見做して、三日の訪れを期待するのである。少納言も、惟光に愚痴を言いたいのを、源氏と紫の上との仲が深いものだと思われることを懸念して憚っている。ただの宿直に過ぎなくとも、源氏と紫の上の縁は結ばれたのであり、父宮に知られてはならず、惟光に疑われてもおかしくない関係なのである。

源氏は結婚できるまでに四、五年必要な今だからこそ引き取つて世話したいと望むのであり、妻ではなく、手元において育てる時間を共有する「児」を得たいのであるが、紫の上の周囲の人々は、源氏が妻として求めているのだと考える。源氏と乳母等との認識にある大きな差が、紫の上の場合によつては男女の仲にも発展し得る可能性のある年頃であることと、一方で源氏があくまで「児」を求めているのだという二つのことを自然に印象つける効果を生んでいる。

二条院に引き取つてからも、源氏は紫の上をごく幼い少女として扱っている。紫の上も源氏を「後の親」と親しみ、源氏の懷で眠ることに恥じる様子もない（若紫二六一）。懷で眠る血の繋がりのない娘は「いとをかしきもてあそび」（若紫二六一）であるが、実の娘でも十歳にもなれば男君と無心に寢所をともにはしない。紫の上は「いとさま変りたるかしづきぐさ」（若紫二六一）である。物語は「児」としての紫の上を丁寧に描いているのである。

## おにじに

ここまで見てきたような特殊な関係がこの二人の間に成立したのは、源氏と紫の上両者が、いわばある種の臨界点にあつたからではないか。「児」になぞらえられた女三の宮は十三、四歳の裳着

を済ませた大人であり、一方紫の上が「児」と呼ばれていたのは、まだ十歳余りで裳着を執り行う少し前であつた。女三の宮は大人ながらに「児」のようであるが、紫の上は「児」のような純真さを秘めた少女時代の最後のひとときに源氏に出会い、やがて年相応に「女君」へと成長する。紫の上の十歳という年齢は、女三の宮の「児」から窺えるような不完全性、欠陥性ではなく、神にも通ずる「児」の純真性を捉えることが許される、ぎりぎりの年齢だつたのではなからうか。少しの成長で妻ともなるが、今少し子どものままでも許される、そんな臨界点にいたのである。

紫の上の「女君」への転換は、源氏によつて急激に子どもの時代に幕が引かれる最後の時まで持ち越され、それまでは「幼さ」が離遊びなどを通して大切に慈しまれてきた。それは、源氏が、紫の上の幼さを限界まで慈しみたかつたからに他ならない。「児」の性質を有する紫の上にだからこそまだ残されていた子ども時間を、源氏は紫の上と共有する。それは源氏自身もまた十七歳という年齢であつたがゆえに許されたひとときなのかもしれない。父母の愛を求めた源氏は、満たされることのなかつた幼少期を「児」の紫の上と過ごすことで取り戻したのである。

しかし、少女が「児」でいられる時間は限られている。成長するにつれ精神的にも肉体的にも大人への変化が現れてくるのは止



められない。限りがあるからこそ「児」の清らかさには特別な価値があるのであり、紫の上もやがて「児」ではいられなくなる。十歳を過ぎても離遊びに興じ、少納言から少し大人になるようにと注意されるあどけない少女であった紫の上も、紅葉賀巻では源氏に対して嫉妬を見せ、古歌を引いて、「女君」と表現されている紅葉賀三三―。無論、この時紫の上が「女君」になりきってしまつたわけではなく、花宴巻では「若君」とも呼ばれ、大人になりかけては、子どもに戻り、子どもに戻つては大人びる一進一退の変動を繰り返している。

大人の真似をして恋の古歌を引くのは、紫の上の自発的な行動であり、「女君」となるのを自ら選んでいる表れでもある。語りの中の呼称だけでなく、紫の上自身の行動が、「女君」への変化を積極的に取り入れてゆくのである。これは、一つには、紫の上の年齢的な成長なのであり、もう一つには、葵巻における葵の上の死によって、紫の上の物語内での役割が変わることをにらんだ展開でもあるだろう。葵の上が源氏の正妻の位置にあつたとき、紫の上は秩序に縛られない紫の上でいることができ、そのために、源氏にとっての癒しの存在であり得た。しかし、葵の上の死後、紫の上はそれまで葵の上が担っていた位置を担わねばならなくなり、大人になることを求められる。

葵の上の死後、久しぶりに紫の上のもとに戻つた源氏は、「灯影の御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかな（葵六八）」と、紫の上が自分の望む通りに成長してきたことを確認し、はじめて枕を交す。源氏が紫の上を「ととのひはて」（葵六九）たと見る基準には藤壺がいる。

「男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり」（葵七〇）。紅葉賀巻に続き、紫の上が再び「女君」と呼ばれるのは、二人が夫婦となつた次の朝、源氏は「男君」、紫の上は「女君」と表現されている。気持ちの上ではまだ大人になりきれぬ紫の上を描かれる一方で、実質的な源氏の妻となつていることを、「女君」という呼称が明示している。「女君」の呼称は「児」として慈しまれてきた紫の上が子どもの殻から出されて、一人の女性となつたことを意味し、紫の上の幼さを大切にしてきた源氏は彼女の成長を認め、「男君」となつて紫の上を妻とする。「男君」「女君」という呼称は紫の上と源氏、両者にとっての「児」からの卒業である。「児」と呼ばれた紫の上は「女君」と呼ばれ、「御かはり」「明け暮れの慰め」から源氏の妻となつたのである。

一方、「女君」と呼ばれる紫の上は、「児」の世界から引きずり出されたことを怒るかのように、源氏の仕打ちを許すことができない。源氏と夫婦になつても幼さを完全には失わない紫の上の姿



が丁寧に描かれるのである。また源氏の方でもこうした紫の上の幼さを許し、衝撃のあまり後朝の歌に返歌をしない様子に、かえって惹きつけられている。紫の上は源氏を癒す純真な「児」として登場し、「児」を「生ほし立つ」関係ゆえに築かれた二人の繋がりは、紫の上が「児」でなくなった後にも、生涯継承されてゆくことが窺えよう。

若紫巻において紫の上に用いられた「児」の呼称は、紫の上が持つ年齢以上の幼さに起因する一方で、その清らかさに源氏が救済を求め、無意識のうちに渴望する「児」の時間をこの少女と共有することで取り戻す必要があったこと、そうした源氏の内面を巧みに物語る呼称であった。この幸福な「児」の時間は、紫の上を自分の掌中に収めていられる「児」と考える源氏の意識の上に成り立っていたのだが、しかし、紫の上が「児」であったのは、源氏が認識する未熟さ従順さのためというよりも、むしろ北山を走り、自身の想像・創造世界の難遊びに源氏を巻き込み、やがて藤壺とは違った一人の「女君」として成長してゆく、強いエネルギーを放っていたがゆえだったのではなからうか。しかしながら、そのことを物語が描くのは若菜巻以降のことである。

注

注1 年立は『新全集』による。

注2 本文は『新全集』による。

注3 呼称検索は『CD ROM 角川古典大観 源氏物語』による。ただし

「春の殿（初音一四三）」については呼称ではないと考え、除く。表記は『新全集』に揃える。

注4 林田孝和「源氏物語主人公造型の方法 紫上を中心にして」（『王朝

びとの精神史』、一九八三年一〇月）。

注5 原岡文子「源氏物語の人物と表現 その両義的展開」（翰林書房、

二〇〇三年五月）。

注6 「幼き人」は幼さを明確に表している呼称として、「人」呼称とは別に一項目として挙げる。

注7 呼称「若君」については別稿を予定している。

注8 「難遊び」についての先行研究は、いずれも、紫の上の幼さを捉える視点による論である。紫の上の幼さを印象づける点はもちろんであるが、本文中に述べたように、拙稿の論点は源氏の側面から、癒しの働きを見ようとした点にある。

## 付記

本稿は、東京女子大学大学院に提出した修士論文の一部をもとに作成したものである。

(二〇〇七年十一月十一日成稿)  
(うがい さちえ 本学博士課程一年)